

おもしろ にいがた学

新潟方言・郷土史研究家 大田 朋子

プロフィール

新潟市出身（出生地は柏崎市）
東京で大学・研究室生活を経てリターン
雑誌記者、コピーライター、ライター、インタビュアーの仕事をするうちに、方言や習俗、歴史に魅せられ、研究、普及につとめる
心理学・新潟学等講師
著書「独断大田流にいがた弁講座」（新潟日報事業社）
「おもしろ えちご塾」（恒文社）等

「はか いくかね？しんでもいいよ…」

方言は、その土地ならではの素朴なあたたかさがありますが、地元の人があたりまえのように使っていることばには、地元以外の人を耳にすると、びっくり仰天！といったものがあります。場合によっては聞き返すこともできますが、意味を取り違えると**おおごと**（大変な、という意味のこれも新潟弁）なこともあり、それが方言の奥深さにもなっているようです。

かつて筆者が、旧豊栄市（現新潟市）で実際採取したこちらのことばも、阿賀北（阿賀野川より北のほうをこう呼ぶ）方面下越地方の新潟弁です。あちこちで吹聴したせいか、新潟弁をテーマにしたお笑いネタにも使われているので耳にした方もいらっしゃるかもしれません。

それでは以下を、みなさま情景を思い浮かべてお読みください。

＜ある畑にて 年配のおっかさまが畑仕事しているところに、あねさが通りかかったときの会話＞

あねさ 「ばあちゃん、はかいくかね？」

おっかさま 「はかなんか いがねわね」

あねさ 「はかいかねんなら、へえ、しんでもいいよ」

こんな会話は地元ならば日常茶飯事？でしょうが、万が一この会話を県外人の人が聞いていたとすると、まるで老人虐待（？）に聞こえてしまうかも知れません。

おっかさまの作業具合を案じて、あねさは、はかがいきますか？はかどりますか？と親切に尋ねて、はかどらないなら、もうしんでも（しなくても、終

了して）いいですよ、と言ったつもりが、新潟のことばを知らない人が聞いたら、お墓に行くか？いかないのなら、あげくのはて死んでもいいよ、とドッキリ発言に取り違えられてしまうことも……。

なんて冗談みたいな本当の話ですが、まだまだ、方言を題材にしたびっくり話はあります。

これも、ある会社の転勤族の支店長さんから聞いた話です。

新潟市に転勤間もないころ、朝、信濃川べりを散歩していたときのこと。

朝の散歩で顔なじみになったおじい様との会話。

支店長 「昔はこのあたりにたくさん鮭がとれたんでしょ？」

おじい様 「ああ、今も捕れるろも、昔は しかもかとれたもんだて」

支店長 「えっ、シカも獲れたんですか？」

おじい様 「ああ、そらねえ、しかも とれたねえ」

支店長 「?????この辺に新潟は鹿がいたんだ!!」

新潟のそれこそよく耳にする方言しかもか（だいぶ沢山）鮭が獲れたということ、支店長は鹿ととらえて、なんと新潟は自然豊か、野趣あふれるところだったということです。その後支店長は、新潟の食や文化の奥深さに魅せられて、すっかり新潟^{びい}眞になりました。

私たちが何気なく使っている言葉のエピソード。季節は春、方言が新潟を去る人・訪れる人とのコミュニケーションの糸口になりますように。

